ハウスメーカーにまかせたり建売業者から購入するのではなく、自分たちが直接参加し、山林に入って間伐を手伝い、大黒柱の木を選び、各種の職人仕事も覚えて、市民参加で住宅建設することとする　楽しい仕事になるはずである

旧来日本の農山村にあった相互労働、結（ゆい）を住宅建設に復活させ、低所得低収入かつ雇用市場が縮小する中で廉価（Affordable）な住宅建設を可能にし、伝統的な木造住宅建築技能を広く継承する機会ともする　本来の仕事の他に建設職人技能を身に付ければ第二の仕事にもなる

建てる自分事化の意義　デザイン権自覚

自分の居住空間がどうあってほしいのか自問　自分で試行錯誤しながらデザインする　消費ビジネス社会で商品購入という受け身だけの立場に押し込まれていた状況から、デザインしてもよいことに気づき、誰もがデザインできる権利保有を自覚する　住宅建設の職人仕事に係わりながら、そのデザイン権復権を具体化して行く　３Ｄカッターで木材を加工し、３Ｄプリンターで植物原料樹脂や炭素素材を加工し、粘土で陶芸品を焼き、日常用品や家具を自分の好みで自作する　技術と芸術の統合を意図的に図る　これを建築学会が先導して実現させる

新百姓

元来『百姓』の語は多種の仕事をして生きることを意味していた(網野善彦説)、一社雇用では倒産や失業の危険があったが、「食べる」と「建てる」を含む複数職業で生計を立てることで安定した生活が可能になる

提案の推進に向けて－教育強化

「食べる」、「建てる」を自分事化し、「買う」しか選択肢がないと思い込まされていた状況から脱却して主体的に取り組む姿勢を身に付けるには、まず教育から改革しなければならない　小中学校から家庭科や技術の一環として「食」、「住」と健康に関する科目が用意されているべきである

地域コミュニティー構築

地域コミュニティー形成と農作業参加

農業法人に農作業者多数を登録、農地に歩いてまたは自転車で来ることができる人の多くが農作業に随時参加する　そこで近隣の多世代者が協働するので、この日常的な接触が地域コミュニティー形成の基礎になる

農作物販売を通じて近隣住民や他地域との交流促進

各季節に各地の協力農家を訪問し農作業を手伝う　自分が食べている野菜がどこでどのように栽培されているかを見学し理解する　幼児期からそれを体験して育つことで消費者と生産者の分断を克服する機会にもなる　自分の居住地と異なった地域、住まい方、職業の人や家族や様々な姿を見る知る、また各地の気候風土が異なっていることを知る機会でもある　子供の頃からこの体験をしておくことが日本の国土や社会全体を的確に理解できる基礎となるので次世代教育としても重要

数か所から購入することで種類、供給時期を分散、通年の安定供給を図る　供給元を分散しておくと災害発生時にどこかが生き延びていればそこから供給を受けることができる意味もある　これらの活動は地元サッカークラブと協力　地方訪問はサッカー試合を兼ねて旅行

地域防災

土地利用の変革により洪水危険地域の被害回避を確実にし、盛土宅地と遊水池(平常時は養魚場)により 50 年,100 年に一度の洪水にも耐える住区が整備される
農作業とサッカークラブを核にした地域コミュニティーの連携力は洪水だけでない地域防災能力を支える基礎となる

この盛土住区は防災拠点を兼ねる　集会室棟があり、そこを拠点事務所とする十分な能力を持ったエネルギー自給施設があり、井戸があり、土盛上３階建倉庫棟に防災備蓄品を収納　コジェネ熱利用公衆浴場は被災後学校体育館等にいる避難住民の風呂としても利用する

まとめ：提案の意味するもの

持続可能な居住：暖冷房に過度に依存しない省エネルギー住宅で風土になじみ快適健康な日常生活を享受、四季を味わい日本の伝統生活慣習を継承する
洪水危険回避軽減への Resilient な国土利用追求　気候変動適応策の緊急課題として短期実現政策を施行すべき
土地利用秩序の回復：都市的用途と農地混在を整理、都市を都市らしく、住居を住居らしく、農地を農地らしく秩序ある土地利用を追求　アメニティーを高め景観も美しく　その実現は建築学会の使命
柔軟制度で土地建物の資産価値維持　快適建築空間を創出　国富増大に貢献
人口減少化、高齢化、経済力低下の中で地域の魅力を創出し地域の資産価値保持
脱巨大都市：都市への過集中を是正して適正密度で国土空間を有効利用　実効用を高め、ゆとりある社会を具現化する場(街)が生まれ、社会的費用便益を根本改善

脱 20 世紀型産業：個別少量生産へ次世代工業への試行　脱大量生産長距離輸送　３Ｄ技術・情報共有、需要地素材で需要地生産　現場で需要内容に即したデザイン実施　余剰電力追従生産　煉瓦焼成の事例
脱販売農業：消費者参加型自給農業で新しい都市近郊農業を創出　高齢化と後継者問題一挙解決　商品販売プラスチック消費も減少　海プラごみ削減に寄与

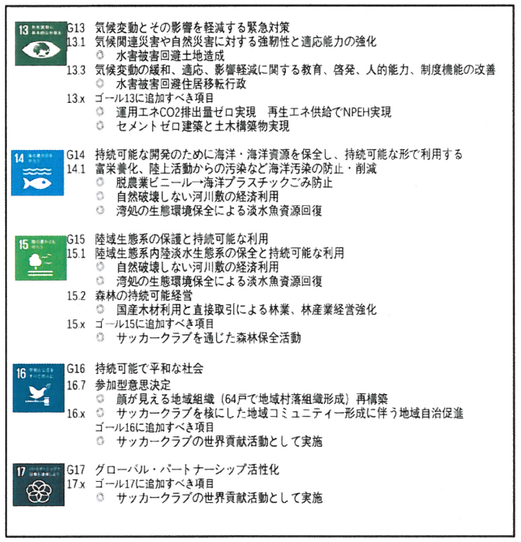
Paris 目標達成の障害だった難問の解決を示唆

脱セメント具体化：世界的な脱セメント化必須　代替素材はケイ素　強度と低価格の両立を 3D 技術と現場少量生産で追求　完全 CO2 排出ゼロで電力需給調整可能な再生可能エネ利用 NPEH を具体化
資本主義経済危機回避、Pandemic Risk と Paris 協定目標に triple-win な社会変革
自給自足、地産地消は Resilient な生活の支え　経済危機、天変地異、社会急変に動じない安定生活を自分達で追求　それは世界的混乱期に翻弄されない生活

安全・健康・充実人生の追求：食の安全と自然の力を戴く食生活追求による健康維持　農薬回避で免疫力強化　農作業を通じ都市で地域コミュニティー構築　それを通じて地域防災も支える　農業を通じ自然とふれあい、命あるものが持つ自然界の柔軟な秩序を学び取る　「農」の実践をきっかけに雇用者、消費者として押し込められ商品化社会、企業雇用社会で分断された関係から脱却　農と建築の自分事化と新百姓化の先に仕事と趣味の統一を超えて用と美、技術芸術を統合　受け身でない充実生活ができることを知り楽しむ

SDGs とロードマップ

SDGs 目標項目を活用して実践点検
ロードマップは着手から 20 年間の計画について示す

ロードマップ

年	事項進捗
1-3年	企画、設計、事業計画、制度設計
1-3年	煉瓦試作、試験栽培、土壌整備
2-3年	立木選定、伐採、葉枯、材木乾燥
3-5年	着工・建設、栽培経験蓄積
5年目	入居開始、庭園整備
5年目	SDGs進行点検
5-8年	初期経験の修正、改良
8-10年	事業拡大(農地買収）、運営改善
10年目	家検中間点検
10年目	SDGs進行点検
10年目	洪水危険地域　住居3割撤去
10年目	健康効果中間確認
10-15年	組織拡充と農地拡大
10-15年	大豆,小麦等栽培定着
10年目	家検1回目
15年目	SDGs進行点検
15-20年	経験蓄積・対外発信
15-20年	健康効果実証
20年目	洪水危険地域　住居完全撤去
20年目	SDGs進行点検、全体成果確認